

田んぼの「どろ」とホタルに感激

家族で水田型市民農園に参加した夏希くんと友貴くん。「田んぼに入れたのが、一番おもしろかった」と、身動きがとれず悪戦苦闘した思い出を笑顔で話してくれました。一緒に参加したお母さんは「米作り以外にもホタルを見に行ったり、ザリガニ釣りをしたり、身近な自然と触れ合えていい体験ができました。野田でホタルが見られるとは思っていなかったの、驚きです」と話していました。



市民農園参加者
天野夏希くん(左)
友貴くん(右)

自然保護を優先した農業経営を行う計画に修正し、江川地区約90ヘクタールをビオトープ(生物生息空間)として再生することとしました。また、平成19年4月から樹林地の保全に関する条例を施行し、保全協定の締結者には申請により樹林地の固定資産税相当額の助成な



市民農園では有機減農薬の昔ながらの米作り体験を

どを行っています。さらに、市が出資する農業生産法人(株)野田自然共生ファームは、耕作放棄地の復田作業などを進め、21年4月から「水田型市民農園」を開設し、600人もの参加者が昔ながらの減農薬による米作りや自然観察会などを体験しました。一方、利根運河は、明治時代に造られた利根川と江戸川を結ぶ約8・5キロメートルの水路で、たび重なる大洪水で昭和16年に運河としての役割を終えました。その後、50年からは野田緊急暫定導水路として利根川口の堤防が



取り払われ、利根川からの分水が始まりましたが、12年から稼働した北千葉導水路事業により、緊急暫定導水路としての役割も終わり、流域の開発など生活雑排水の流入で水質が悪化し、豊かな水辺環境が悪くなり始めています。そこで市では、利根運河の水環境を守るため、運河流域の5市と国・県と連携し調査・研究することを国へ提案、18年に「国土施策創発調査」事業に採択されました。同事業では、利根運河流域を対象に、「自然や歴史と調和した美しい地域空間」の実現に向け、利根運河を核とした自然・歴史・文化が体験できる「利根運河エコパーク」の実現を目指します。

また、この提案の実現に向け、19年度に学識経験者・国・県・市・関係団体による「利根運河協議会」が設立され、国や関係各市と協力して利根運河を回廊とし、周辺の自然を核とした利根運河エコパークづくりのための実施計画を策定。さらに、江川地区の水環境の改善やより多くの生物が生息できる、里山の環境づくりを進めるため、減農薬による米作りや水田への冬期湛水を行い、農業と自然が共生する地域づくりに取り組むなど、多くの生物が生きていける生物多様性が維持され、いつの日か自然保護のシンボルでもあるコウノトリが来ても、住み着けるような場所作りを目指しています。



エコパークづくりを進める利根運河